

と、第二の計畧を云つて見たが矢つ張り効力がない、

「何云つてるのだ、此の毛唐人奴海の荒るのは自然に荒るのだ。そんな事は貴様よりか此方の者が好く知つて居るぞッ馬鹿野郎奴生命が惜いものだから、いろんな事云つて助かるうとしやアがつて……」

……

「本當に往生際の悪い奴だ……大概に覺悟して了ひッ」

と、何うしても助ける氣色もない、

其中に枯草や枯れ木を運んで來た若者は、

「ヨイシヨク……」

と、掛け聲して木や枯草を積み上げて、

「さあ出來たぞ……」

「仕度はいゝのか……」

「おゝヨシ……」

と、出來上がったのは一つの刑場である、

怖ろしい魔術の神様

積み上げられた枯草には火が放たれた。夫れが非常に猛烈な勢ひ

を以て枯木に燃え付いたので、炎々天を焦すばかり夫れが海面の怒濤に映じて物凄くなつて居る、

哀れや彼の魔術と忍術の怪漢は今や將に此の灼々たる紅焰の中に投せられようとして居るのだ、

「さあ往生してしまひ、最ふ何んど云つたつて駄目だから………男らしく死ぬがいゝや………」

と、手取り足取り首を取りて猛火の中へ投り込まんとする一刹那怪漢の爲めには真に神様の助けとも云ふべき一大不思議が起つたのだ、

恰度日蓮上人が、北條の手に捕はれて龍の口に斬手の手に斬られやうとする刹那に雷火の起りし如く、

遙か天の一隅に流星燦と流れたかと思ふ間に之が忽ち隕石となつて轟然大地を振撼した、

其勢ひは宛然飛行機の上から爆弾を投下したやうに大地に深く穴が明いて四邊の砂は濛々として煙りの如くに飛び散つたが其猛烈さは驚くばかりで土人等は皆顔色を失つて、黒い顔が紫色と變つた、
そして、

「ヤアッ大變だ………」

ど、バラ／＼と其場を逃げ出した者も多くあつた。

斬らしくすると砂煙りも静まり海の荒れも穏かになつたので逃げ出した土人等もポツ／＼戻つて來た。

「何んであろう今落ちたのは……」

今殺しに掛つて居る罪人を其方除けにして落ちた所へ多勢がゾロ／＼寄つて見ると其落ちたのは大きな石で其石の中に星の如く燦然と光りを放つものが閃いて居る。

此の光と閃きを見た土人等は忽ち特性の迷信を起してしまつた、そこで互ひに顔見合はせて、奇異の思ひをして居たが其中の顔立つ

た者が皆に向つて、

「コリヤ本當に神様が怒つたのだよ、彼の日本の日吉丸とかと云ふ華族の子息を殺うとしたのだで……」

「神様の子だと云つて居たが眞實だね……」

「海が俄かに荒れたり、天から恐ろしいものが落ちたりするのは何うしても神様のなさる業であらう……」

「彼の子息さんを殺さずに好かつたね……」

「若し火の中へ投り込んで了つたならば最つと大變な事になつたのだね、お、怖い……」

「亂暴な事すると島中の者が全滅すると云つたが其通りだ、日本人は嘔吐きだと思つたが正直だね……………」

「神様の國だと云ふが全く神様の國だよ……………」

「昔し蒙古人が日本を攻めに往つた時も神様が俄かに怖ろしい風を吹かせて拾萬人を海の底へ一呑みに呑んでしまつて、生て歸つた者が三人しかなかつたそうだから、日本人の中には神様が澤山居るよ……………」

「そうともく此上崇のない中に早く彼の神様の息子様を助けて我々に難儀のかゝらんやうにしようよ……………」

と、直ぐに繩を解いて、

「何うも若様飛んだ失禮致しました、實は他の西洋人と思ひ違つたので悪ござんした何うかお許し下さい……………」

土人の方から斯んな風に怖れて來たから、

日吉丸は、最う大威張りだ、

「だから僕は二度も三度も君達に注意したのだ僕の體は今茲に君達の爲に火炙りにされて死んでしまつても直ぐに神様に生れて天に上るから無んでもないが君達の方は、其罰で斯う云ふ大きな石が二十も三十も天から落ちては、破烈して君達を片ツ端から殺し盡してし

まふから夫れが可愛そうだよ、そして其の罰に當つて殺された者は再び此の世界へ人間として生れて来る事が出来ぬのだ、大概虫に成つて鳥の爲めに食ひ殺されるよ……」

と、又しても出鱈目を云ひ立てたが今度は幾許何んと云つても土人の方では目の前の不思議に驚いて居るのだから、

「成る程、そうでしたか、お蔭様で助りました有難う存じます何うか此の島に永久居て下さるやうに、

と、尊敬される丈け面白くなつて来た、

世の中は妙なもので自分の方から無理に仕様とすると失敗するが

先方から持込んで来れば此方が得意となつて来る、強味が出て来る謂ゆる守勢が攻勢と轉じて来るのだ、

法螺の日吉丸は全く法螺を吹きのたのである、

魔術か忍術かが悉く本物らしく野蠻なる土人等に深く感じられたのである、そこで彼れは愈々爲朝が白縫姫の婿になつて流球を征伐したやうに自分も此の機會を巧みに利用して南洋諸島の土人等を子分として歐洲大陸に雄飛しやうと云ふ愈々大空想を起して来た、

潜航艇分捕り

勝てば官軍負ければ賊よと云ふ譬の如く、日本で失敗した彼れは南洋の孤島に於て土人の親分となつた、

而し、戀の仇と憎まれては彼れ等を心服させる事が出来ぬと思つて須美子嬢には再び云ひ寄る事はなかつた夫れが又た妙なもので益々土人の信用を受けるように成つたのである、

彼れは日本に於て悪事を働いた爲に捕れの身となり罪人となつた

のであるが、斯る身となると、其罪人となつたのが今更耻かしいのである。

其耻を雪ぐがために何うかして日本の國家に盡して皇恩の萬分の一にも報じ奉り度いと云ふ優しい忠義の心が起つて來た、夫れには學問が無い世の中の事情にも暗い……同じ日本人同士を子分に持つたのであれば、日本人丈の智慧を合せて仕事にかゝるが何を云ふにも悉く南洋の土人ばかりで、自分よりもより智識も分別も無い野蠻人ばかりであるから、奇抜な計畧も雄大な望みも容易に手を出すことが出来ない、

「自烈たいなあ……」

と、嘆聲を洩す事も度々あつたが持つて生れた冒險的氣象は一日寸時も愚圖々として居る事が出来ない、

「何か目覺しい事は無いかしらッ……」

と、頻りに心を配つて居る折から歐洲戰亂は益々擴大して、強そ
うな横綱だと思つた露西亞はコロリと土俵際に倒れ、三役の中の手
取者と思つた伊太利は折角のアルプス越も一時の夢で、退却又退
却するので、

暴慢極りなき獨軍は益々暴威を振つて、伊佛の兩國内に殺到して

居る、そして陸に暴れる彼れは海にも又暴れ廻つて居るのだ、

地中海に出没して商船の撃沈を商賣のやうにして居る敵の潜航艇
は段々圖々しくなつて來て印度洋に現はれ、

又た南洋にも現はれると云ふ風説が、島人の耳に傳はつて土人等
は騒ぎ出して來た、

「あんな亂暴國の船が此の島へやつて來たらどうしようか！」

「折角日本の神様に救はれて安心したと思つたら……」

「而し此島までは來る事が出來ぬであらう……」
寄ると集ると斯んな事に心配して居るのが日吉丸の耳に這入つた

から堪らない勇氣凛々常に目覺しき活動半のあれかしと祈つて居た
 彼は占たと計に踊躍して喜こんだ。

「宜しく潜航艇を捕りすべしだ……」

と、土人の中でも勇敢にして頓智頓才のある者を撰抜して漁船に
 打ち乗り自分も其顔に墨を塗つて土人に見せ掛け毎日海上を偵察し
 て居たが其三日目に圖らず怪しき一隻の艇を發見した、正しく潜航
 艇……而も敵國の潜航艇が大膽に日本の商船を撃沈するためには
 没して居るのであつた、

黒人に化けた日吉丸は態と其方へ潜ぎ付けると彼等は土人と思つ

て安心し航行汽船の様子を開くために潜航艇の中へ連れ込んでしま
 った、

胸に一物ある黒人の日吉丸は艇長の爲すまゝに自由になつて居た
 が、臆て一寸の隙に乘じ短兵急に起つて艇長を一刀の下に刺し殺し
 同時に他の黒人等も此の瞬間に乘組水兵等を刺し、一人を捕虜と爲
 し、其儘航行して島の波止場に着いた、之れを見た土人等は

「萬歳く」

を、連呼して、其成功を祝した、

日吉丸は直ちに日本の領事館に上申して潜艇を提供したので彼れ

は大いに其勇敢を賞され内地に於ける不名譽は此の壯舉と共に悉く雪がれてしまった、
(おはり)

魔術か忍術か

大正七年一月十八日印刷
大正七年一月廿一日發行

定價金貳拾五錢

不許複製

庫文偵探界世

◀ 魔術か忍術 ▶

編者	牛田照雄
發行者	鈴木與八
印刷者	加藤敬直
印刷所	大博堂印刷所

東京市淺草區南元町三十番地
東京市芝區南佐久間町二丁目十一番地
東京市谷區南佐久間町二丁目十一番地

發行所

東京市淺草區南元町三十番地

盛陽堂書店

電話下谷六一六八 振替東京一四七〇六

大泉清先生著

卵を多く
産ませる

素人養鶏

菊判形美本
紙數百頁
定價三十錢

近時非常に養鶏の流行して來ました。その商賣的なるに云ふ者も、樂み半
分つまり道樂的にする人、多くなり、其の爲め、急に養鶏熱が盛に
共に經濟上喜ばしい事と言はれ、なりませんが、飼へ方がやさしい、亦手間が掛らない、そ
れに子供より老人に至るまで、誰にもできる、萬人向きである、そればかりでなく、澤山飼
へば、飼ふ程金が儲かる、又常に新しい玉子がたべられる、これ六ヶ敷かつたり、や
れで、今迄でいる、さ養鶏の本が有り、ました、が、本書は、其の名の通り、どんな素人の
し過ぎたりして、思ふ様な、が、あり、ませんでした、が、御書は、其の名の通り、どんな素人の
方、に、ても、直ぐ、呑み、込め、る、様、に、書、いて、あり、ます、から、御、やり、に、な、る、と、云、ふ、方、は、是、非、共、此
素人養鶏法に依つて御始めなされる様御進め申す

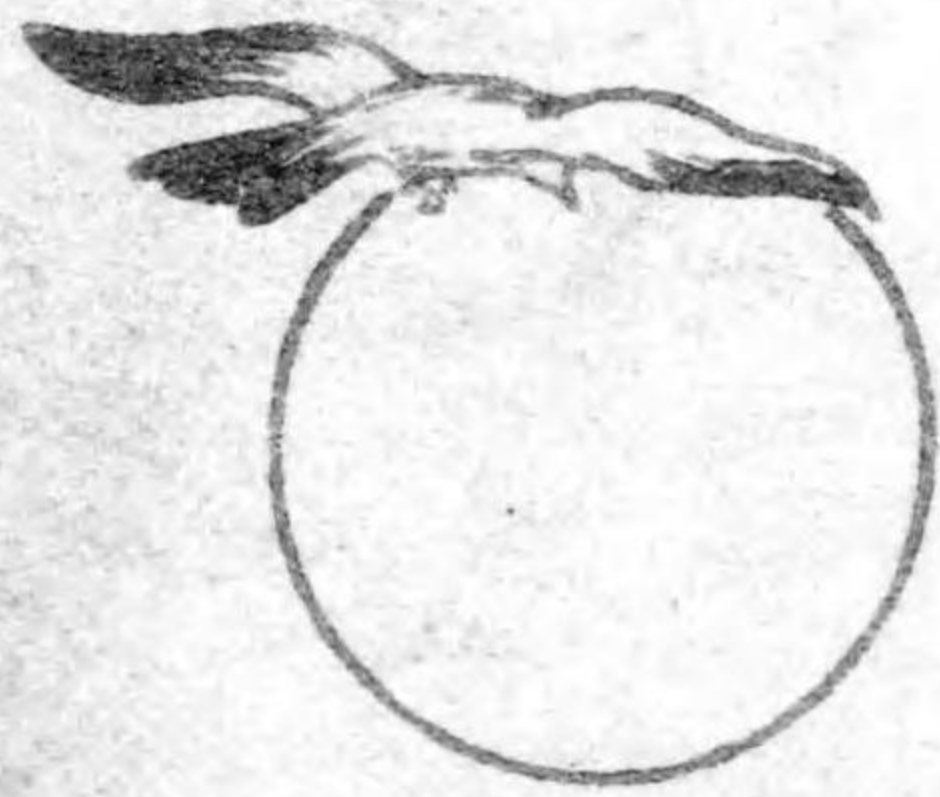
東京市淺草區南元町三十番地

發行所 盛陽堂書店

電話下谷六一六八番
振替東京一四七〇六番

1778
1781

終



東京
盛陽堂發行